

次世代につなげる土作り ～堆肥の投入で地力維持～

西尾市 石川 喜久雄さん
水稻・小麦・大豆

【平成 24 年 9 月 24 日掲載】

西尾市で水稻・小麦・大豆の大規模経営を家族で行っている石川さんを紹介합니다。石川さんは、大豆の優れた耕種技術により、先進的な豆類生産経営体に贈られる全国豆類経営改善共励会の生産局長賞を受賞されました。また、大豆に限らず、水稻に関しても地域でいち早く、愛知県が開発した水稻不耕起V溝直播栽培に取り組むなど常に新しい技術に挑戦してきました。

就農の経緯

石川さんの実家は、養豚と水稻の複合経営を行う農家でした。その内、養豚は 20 頭程度と小規模なものでしたが、石川さんも養豚経営を続ける前提で、高校卒業と同時に愛知県種畜センター（現愛知県畜産総合センター）で1年間の研修を受け、昭和 46 年に就農しました。



石川 喜久雄さん

経営における 2 回の転機

石川さんは、就農後 1 年間は養豚を中心に行い、将来的にも養豚経営の規模拡大を考えていました。しかし、地価の高騰により土地取得が難しくなったため、機械化の進みつつあった水田作主体経営への転換を決意します。幸い、地区でも農家の兼業化が進み、水田の受委託が一般的となりつつあったことから、農業機械を所有していた石川さんのもとにも水田が集積し、規模拡大を果たすことができました。今振り返ると、そこでの決断が 1 回目の転機だったそうです。

2 回目の転機は、平成 16 年に認定農業者として西尾地域水田農業ビジョンにおける地域の担い手に位置付けられたことでした。これにより、利用権設定による農地の賃借が一層進み、現在の経営規模（約 70ha）まで農地が拡大しました。

新たな技術への積極的な挑戦

石川さんの経営における 2 回の転機を聞くと、難なく経営規模を拡大させたように聞こえますが、水稻だけでも 20ha 以上あり、それだけの作業を家族労力だけで行うのは並大抵のことではありません。そのため、石川さんは積極的に水稻の省力化技術に取り組んできました。特に、水稻不耕起V溝直播栽培に関しては、試験段階から県関係機関と協力し、地域でいち早く導入しました。冬場の用水路に水のない西尾地区では、本栽培に必要な冬季代かきを行うことができないため、関係機関と連携を図り、用水路への試験通水を認めてもらうなど苦労されたそうです。さらに、冬季代かきの代替技術としてレーザーレベラーを用いた鎮圧にも積極的に取り組み、現在では、水稻面積の 6 割が直播栽培となっています。

また水稻だけでなく、小麦においても 3 つの作業を同時に行う、耕起・施肥・播種同時作業技術にも取り組み、大幅な作業時間の短縮が可能となったそうです。

大豆栽培の極意

石川さんの大豆ほ場では、例年、県平均収量の1.5～2倍の成績を上げています。収量増加のコツをお聞きしたところ、特別なことは何もないとしながらも、以下の3点を教えてくれました。

- ① 畝たて …… 湿害回避
- ② プラソイラーによる深耕 …… ほ場の排水性の向上
- ③ は種時の病害虫防除の徹底 …… 初期生育の向上

石川さんは、播種が8月になると収穫期までに十分な生育期間が得られず、収量が低下するため、7月20日頃までにはすべてのほ場の播種作業を終えたいと考えています。その為、梅雨が長引き、播種期と重なるような年には、①、②の作業の有無で生育が大きく変わってくるそうです。



畝たてされた大豆ほ場

後継者について

現在一緒に働く長男は、今から5年前、石川さんが一時的に体調を崩した際に就農を決心してくれたそうです。その当時は、還暦（平成23年）までには経営委譲をしたいと考えていたそうですが、体調も回復したことから、先延ばしになってしまったとのことでした。「ただ、5年後までには経営委譲をしたいな。」と笑顔で語ってくれました。

地域との信頼関係の構築

石川さんに経営理念を聞いたところ、一言目に「地域との信頼関係の構築」との言葉が出されました。お祭り等、地域の行事には積極的に参加するなど、地域の人との繋がりを大切にしているそうです。結果として、ほ場の管理を気持ちよく頼んだり、頼まれたりする人間関係が築けるとのことでした。

また、地元小学校の農業体験にも長年協力し、地域の食農教育にも大きく貢献しています。ほ場の準備等には、安全面も含め、苦労も多いようですが、地域の農家が減少する中で、子供達が食糧の生産に触れる機会を作りたいとの思いから続けているそうです。



畦畔管理の機械がスタンバイ

次世代につなげる土作り

「預かるからには水田の地力維持に気をつけている。」と話す石川さんは、委託されたほ場に毎年堆肥を投入し、地力の維持を図っています。また、「自分たちの代だけ見れば必要のないこと

かもしれないが、水田を地域の資源として考えれば必要なこと」と話すように、次世代の担い手のことも考えながら、「持続可能な農業生産」を実践されています。

その成果は次世代だけでなく、現在の収量にも確実に現れているように感じました。



- (左) 堆肥を投入したほ場、
- (右) 堆肥を投入していないほ場

執筆：農業経営課
取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課
西尾駐在室